

# 『日本の気候変動2025を用いた気候変動解説の手引き』について

---

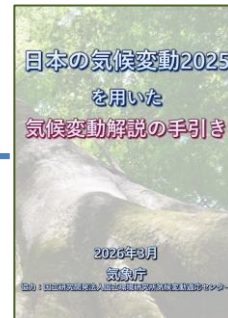
2026年4月23日

気象庁 大気海洋部 気象リスク対策課  
気候変動対策推進室

# 『日本の気候変動2025を用いた気候変動解説の手引き』

2026年3月、『日本の気候変動2025※』を用いた気候変動解説を支援するための資料を公表しました。

※日本における気候変動に関して観測結果と将来予測を取りまとめた資料（2025年3月、文部科学省・気象庁）



- 位置付け：  
普及啓発の場面での的確な説明を支援するための表現に関する補助資料

- 内容：
  - 「日本の気候変動2025」本編の内容に、説明表現や注意点等の補足を記載
    - ✓ 独自に文章を書く場合や、口頭で説明する場合に使う表現について「適切な言い換え表現」、「非推奨の表現」の例
    - ✓ 説明に適した例え
  - 問い合わせが多い事項に関する追加説明
  - 「平均気温1°C上昇の意味」の補足説明方法
  - 説明時に紹介できるような生活等への影響（「気候変動影響評価報告書」から引用）
  - や適応策事例等

かみ砕いた説明が科学的に誤った表現になっていないか

実感してもらうために必要

地方公共団体等担当者の活用推進

※「本編」自体は2025年3月公表時のまま更新等はせずに、上記を追加

# 『日本の気候変動2025を用いた気候変動解説の手引き』を公表しました

## 報告書本編

## 解説

## 報告書本編

### 日本の年平均気温について 「上昇率は100年当たり1.40℃の割合」



## 解説

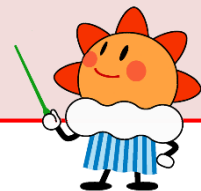
### 上昇率や増加率について説明する際は以下のような表現に注意してください。

× **100年で●℃上昇**  
(特定の100年間(例えば1921年から2020年)の上昇量が●℃であることを意味するわけではなく、1898～2024年の平均的な変化の割合を示しているため。)

× **2024年までの100年で●℃上昇**  
(2024年までの100年で計算したのではなく、1898～2024年で計算した結果を100年当たりの上昇量で示しているため)

× **100年前と比べて●℃上昇**  
(特定の年に対する上昇量ではないため)

○ **100年当たり●℃の上昇**  
(「割合で」を省略しても構いません)



New!

New!

上昇率や増加率について説明する際は以下のよう  
な表現に注意してください。  
× **100年で●℃上昇** (特定の100年間(例  
えば1921年から2020年)の上昇量が●℃である  
ことを意味するわけではなく、1898～2024年の平  
均的な変化の割合を示しているため。)  
× **2024年までの100年で●℃上昇** (2024  
年までの100年で計算したのではなく、1898～2024  
年で計算した結果を100年当たりの上昇量でして  
いるため)  
× **100年前と比べて●℃上昇** (特定の年に対す  
る上昇量ではないため)  
○ **100年当たり●℃の上昇** (「割合で」を省略  
しても構いません)

「【参考】日本の気温上昇が世界平均よりも大きい  
のはなぜか?」(p.30)において、背景要因として  
考えられることを記載しています。

異なる地点間などで上昇率(トレンド)を比較する  
場合には、上昇率を算出する対象期間を統一する  
必要ががあります。例えば、統計期間が近年の短い地  
点で算出した上昇率を、より長い統計期間の地点  
の上昇率と直接比較することは適切ではありません。

このグラフの基準値は、1991～2020年の平均値で  
す。一方で、本報告書では(1)のように工業化以  
前(1850～1900年の平均値)を基準値としたグラ  
フも示しています。各グラフの偏差を比較する場合は  
、基準値の違いに注意してください。

なお、パリ協定の目標は工業化以前と比べた世界  
全体の平均気温の上昇を2℃より十分低く保つこと  
もに、1.5℃までに抑える努力を追求するというのも  
です。パリ協定では「工業化以前」の具体的な時期を  
示していませんが、IPCCでは世界平均気温につい  
て、1850～1900年の平均値を工業化以前の状態  
の近似値としています。図4-1-2の1991～2020年  
を基準値とする各年の値は、パリ協定の目標と比較  
可能な数値ではないことに注意してください。  
また、偏差の順位は、平均気温の順位と同じです。  
つまり、偏差が1位となった年は、平均気温が1位  
となった年と言い換えることができます。

グラフの折れ線(黒)を見ると、年ごとに線が縦が  
上下していることが分かります。このような年ごとの短  
い期間の変動を取り除き、ある程度長い期間の変  
動を抽出する方法が移動平均です。グラフの折れ線  
(青)で示されている移動平均を見ると、年ごとの  
細かな変動を取り除かれてはなめらかな線になっていま  
すが、それでも上下する変動があることが分かります。  
これは数年から数十年の周期をもつ変動などが重なり  
合っているためです。  
また、地球温暖化による気温上昇は、更に長期間

- [世界] IPCC 第6次評価報告書は、極端な高温(熱波を含む)が1950年代以降ほとんどの陸域で頻度及び強度が増加している一方で、極端な低温(寒波を含む)の頻度と強度が低下していることはほぼ確実であり、人為起源の気候変動がこれらの変化の主要な駆動要因であることについては確信度が高いと評価している。(詳細編第4.1.1項)
- (2) 日本の年平均気温の上昇率は世界平均よりも高い
- [日本] 都市化の影響が比較的小さいとみられる気象庁の15観測地点<sup>29</sup>で観測された年平均気温は、様々な時間スケールの変動を伴いつつも、長期的に上昇しており、その1898年から2024年までの**上昇率は100年当たり1.40℃の割合**である。特に1990年代以降、これまでの記録となるような高温年が頻出している。(図4-1-2、詳細編第4.2.1項)
- [日本] 北半球の中緯度は陸地が多いため、日本の平均気温の上昇率は世界平均よりも高い。(詳細編第4.2.1項)

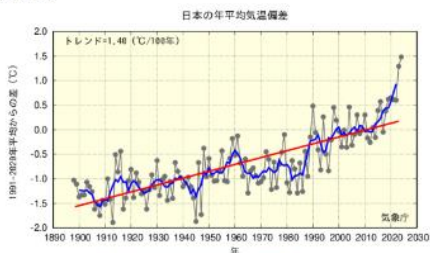


図4-1-2 日本の年平均気温偏差の経年変化(1898～2024年)

折れ線(黒): 各年の平均気温の基準値からの偏差、折れ線(青): 偏差の5年移動平均値、直線(赤): 長期変化傾向を示す。基準値は1991～2020年の30年平均値である。

5年移動平均値はその年と前後2年を含めた5年分の平均をとった値である。5年移動平均をとることによ  
り、年ごとの短い期間の変動を取り除き、これらよりもゆっくりとした変動を抽出することができる。

29 ここでいう熱波(Heatwave)とは異常に暑い天候が続く現象のこと。2日間から数日間続く、相対的な気温の顕著な上昇を定義されることが多い(IPCC第6次評価報告書)。日本では、熱波を示す数値上の定義はなされていない。

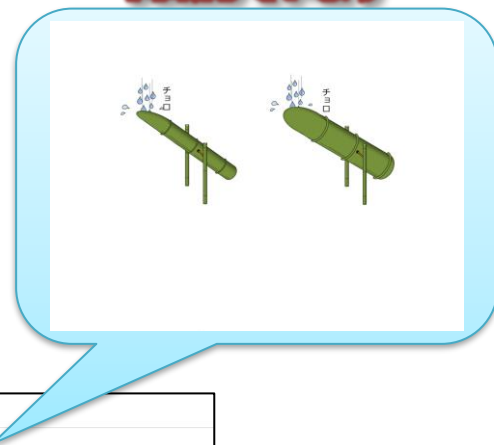
30 日本の平均気温偏差の算出は、全国の地上気象観測地点の中から、観測データの均質性が長期間確保でき、かつ都市化等による環境の変化が比較的小さい地点を使用している。このような地点から地域的に偏りなく分布するように選出した15地点が、観音、根室、梶野、山形、石巻、伏木、飯田、鏡子、埴田、彦根、宮崎、多度津、名瀬及び石垣島である。これらの観測地点を平均した日本の年平均気温の長期変化傾向に対しては都市化の影響がほとんどないことが考えられる(図4-1.4参照)。気象庁では、これらの地点ごとに年平均気温の偏差を算出し、15地点点を平均することにより、日本の年平均気温の偏差としている。

# 解説の手引きの閲覧方法

- 『日本の気候変動2025』 ウェブサイトに掲載 (PDFファイル)  
<https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/ccj/index.html>

<p><b>概要版</b> ／まずはこちらから／</p> <p>PDF版 English(PDF) PPT版</p>	<p><b>本編</b> ／基本を網羅／</p> <p>HTML版 PDF版 正誤表(PDF) <b>解説の手引き(PDF)</b></p>	<p><b>詳細編</b> ／より詳しく／</p> <p>PDF版 PDF版章別 正誤表(PDF)</p>
<p><b>都道府県別リーフレット</b></p> <p>PDF形式</p>	<p><b>解説動画</b></p> <p>動画形式</p>	<p><b>素材集</b></p> <p>素材集</p>

図や動画の素材も掲載しています



「日本の気候変動2020」からの主な改善点 <sup>(New)</sup>

<p><b>概要版</b></p> <p>素材一覧 PDF形式 PPT形式</p>	<p><b>本編</b></p> <p>素材一覧 <b>解説の手引きの素材</b> HTML形式 PDF形式</p>	<p><b>詳細編</b></p> <p>素材一覧 PDF形式</p>
<b>詳細編章別</b>		